2025年6月7日

人権ネットワークノ八幡　NEWS

事務局　〒523－0857　近江八幡市八幡町170（旧八幡教育集会所内）
電話　【携帯】　080－2525－7114(高坂)
【メール】　Tko.koj1224@yahoo.co.jp

所内雑報

「ここは　どういう施設ですか？」
～北海道からの訪問者～

子どもの日の午前中、何の予定もない私は集会所でコーヒーを飲みながら「5・23石川一雄さん不当逮捕62ケ年糾弾!」のポスターを書いていた。すると、玄関の方で何やら音がして、事務所に見知らぬ女性が顔を出したのである。(ドキッ!!)

「すいません、足を痛め湿布を貼りたいのでトイレを使わせてもらえませんか？」。私は「どうぞどうぞ、ホールの奥のトイレを使ってください」と言いながら案内した。

玄関にはもう一人、連れの男性が頭を下げて立っていた。観光客のようなので「どちらから来られたのですか?」と尋ねると「北海道から…」とのこと。(ええ～遠い所から…)と思いながら、たまたま傍に「人権ニュース」(アイヌ特集号)が置いてあったので、彼に渡し話を続けたところ、彼は「ここは、どういう施設ですか？」と問われたのだ。

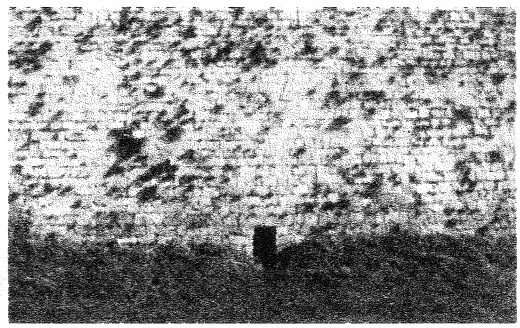
私はここぞとばかりに「人権ネットワーク」や地域の運動等の話を熱く語り出していた。何と、その人は岡林信康のことも知っていた。まさか、たまたまやって来た建物(集会所)で、アイヌ・オキナワ・ブラクの話が聞けるとは思っていなかったであろう。

小西市長さん、けっこう「八幡教育集会所」、役に立ってるのと違いますか?!　(TK)

海外よもやま話㊶

「あら、おばさまも女よ　byシータ」

風の吹くまま気の向くまま、明日の宿は明日決める、海外放浪一人旅。今日はラピュタとシリアのお話。



「それでもお前、男かい！」
「男が簡単に諦めるんじゃないよ」
「お前は戻っておいで。なぜってお前は女の子だよ」

先日、人生通算30回目ぐらいの天空の城ラピュタを家で見ました。上のセリフは、海賊ドーラー家のおばちゃん船長ドーラが、パズーとシータに言ったものです。男だからとか女だからとか言っちゃってるから今の時代ではあかんのかなぁ。僕はこのセリフもこのシーンもドーラ船長も大好きなんですが。。

「それでもお前人間かい！」「人間が簡単に諦めるんじゃないよ」に変えますか？なんか変やなぁ。

写真は、ラピュタのモデルになったと言われているシリアの世界遺産、クラック・デ・シュバリエ。観光客ほぼいません。めっちゃおすすめです。ぜひ行ってみてください。

(K.Kisuke)

お知らせ

6月14日(土)開催の2つのイベント

まずは、「人権映画見て歩き」の渡邊幸平さんから『新幹線大爆破』(1975年公開)、高倉健・千葉真一らオールスター映画の上映会のご案内。

会場は馬淵コミュニティセンター。上映は9:30～12:00。鑑賞希望の方はコミセンまたは☎　090－3351－0995に問合せてください。

次に、八幡学区まち協の住みよい町づくり推進講座。「おいしい食材"あぶらかす"を知っていますか」の演題で、講師は河井和弘さんと井上典子さん。

こちらは、10:00～11:30が講話、その後11:40から調理体験＆試食会の日程です。会場は八幡コミセン。　2つのイベント、関心のある方はご参加を。

いと をかし ～これが私のふるさとです Ver.《そら豆地蔵》～

つれづれなるままに　日暮し　駄菓子屋を営む。
訪れる子らがお菓子食べ食べ、日々を語る声こそ　いとをかし。

「おばちゃん、知ってるか？最近、お兄ちゃんやおっちゃんたちが、《そら豆地蔵》さんの屋根を直してくれてはんねん」と情報通のお子さん。「ソ・ラ・マ・メ？」「何それ？」と、ぽっか～んとしている子を尻目に、「えっ、なつかし～！」と盛り上がる八幡保育所卒園生たち。「八幡保育所の時、そら豆握りしめて『いつもありがとう』って、お供えしに行ったなぁ」「それなぁ！」小学校低学年から中学生までの幅広い年齢層が《そら豆地蔵》をキーワードにワイワイ楽しそう！

「これが私のふるさとです」（１９９１年３月３日八幡地域総合センター発行）によると、《そら豆地蔵》の始まりは、『藤田時蔵氏が、京都河原町の畑田氏に相談に行ったところ、「ゴミで埋まった地蔵さんを大切にせなあかん」と教えられ、散らばっていた地蔵石を集めて大切にしたところ、町の人の病気が治ったと言われます。その後、大切にされてきました』と書かれている。

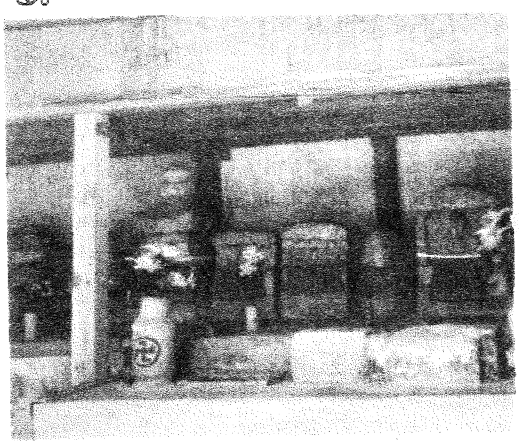
そんな情報を得たら、行って確かめてみたくなる。大型連休のある日、自転車で町内を「昼に駆ける」。

昼前という事もあってか、町内で開店したばかりのラーメン屋さんは、大にぎわい。澄み切った青空の下、あちこちからBBQをする楽しそうな声も。炭火焼の美味しそうな匂いが町中に漂い、それだけで幸せ気分。匂いだけで缶ビール１本、もしくは白飯がほおばれそう。「あっ、駄菓子屋のおばちゃんや！」と声をかけてくれるお子さんに手をふり、めざすは《そら豆地蔵》さん。

八幡地域青年会リーダーを中心に八青会のメンバーが、お地蔵さんの周りに足場を組んで、屋根の修理をしてくれている。かなり大がかりな修繕のため、スキルと費用と時間を要することが推測される。完成は夏ぐらいになるのだろうか…。

後日訪問させていただいた保育所では、子どもたちが話していた取組が今も続いていることを、丁寧に説明してくださった。「４歳児の時にそら豆を植えて、５歳児の春、育てた豆を収穫して、給食でいただきます。それだけではなく、むいたそら豆は《そら豆地蔵》さんにお供えをしに行きます」「《歯を強くしてくれる》という言い伝えがあると伺ったので…」というエピソードも付け加えてくださった。小さい頃から、まちを歩く・見る・触れる…という体験が、子どもたちの心にしっかり根付いているんだと、納得。

前述の「これが私のふるさとです」の冊子には、丸岡忠雄（１９２９年生まれ）代表作の一つである「ふるさと」の詩が冒頭にある。人権教育の副読本『にんげん』にも掲載されてきたこの詩は、長男誕生の日に被差別部落に生きる父の願いを込めて書かれた作品である。《…吾子よ　お前には胸をはってふるさとを名のらせたい　瞳をあげて　何のためらいもなく　「これが私のふるさとです」と名のらせたい》という強い思いで締めくくられている。時を経ても、変わらぬ思いである。



今、近江八幡市が、《「子ども」が輝き「人」が学び合い　ふるさとに愛着と誇りをもち　躍動する元気なまち　近江八幡》と掲げるように、休日に、若者（もと若者）たちが、継続して、まちのために楽しそうにボランティアで汗を流す姿を子どもたちは、しっかり見ていることを実感。即効性はないかもしれないが、じわじわと効能を発揮することになるだろう未来への種まき。《そら豆地蔵修繕プロジェクト》に感謝。

感慨にふけっていると、「おばちゃん、はよ店開けて～。時間や、時間！」とベンチに座って待つお客様。「わかった、わかった～」と自転車のペダルを思いっきり踏み込む。さぁ、今日のところは、これから開店！

（SM）